

巻頭言

巻頭言に寄せて

蔵 知 毅

編集子より巻頭言の依頼を受けたが、以前自分で依頼をしていた手前、今更乍ら大変なことになったと思うのである。

岡山畜産便り第1号が発行されたのは昭和24年11月である。爾来今日まで継続して通巻実に109号にまでなったわけである。

この間私も一時編集の責任を負ってやって来たのであるが、今日その跡を振り返って見ると実に感慨深いものがある。

巻頭言も第1号は佐藤副知事、第2号は本城経済部長で第3号になって初めて惣津前課長の年頭偶感が出て来るが、それ以来今日まで実に10年の間、海外旅行時の1-2回を除いて、毎号巻頭言を書かれた惣津前課長の御努力とその健筆には全く頭が下がるのである。今日座右に積んだ岡山畜産便りをひもとくと、全く岡山県の畜産の歩みであり、歴史でもあるわけである。畜産のあらゆる面に亘って、時の流れと共にその話題を筆に乗せ、或いは教え、或いは希望を述べ、或いは激励し、或いは決意を述べて、畜産の同志に訴え、先頭に立って畜産の発展に努力されたのである。一口に10年とは言ってみても、毎月発行されるこの機関誌のために多忙な激務の中で執筆されることは並大抵のことでは出来ないことであって、今更乍らその御努力に感謝をすると共に敬意を表するものである。

全国にも幾多のこの種の機関誌はあるけれども、一応その存在を認められ、全国に名の通ったものは数えるほどしかなく、岡山畜産便りがその中の一つとして、輝やかなしい存在となっていることも、実に惣津前課長の本誌に対する愛情の賜であって、畜産人として厚く感謝しなければならないわけである。

伸び行く本県の畜産界の現在を見る時、本誌の持つ使命も重大であり、畜産発展の一翼を担って、新しい発展を祈るわけである。